

死線を越えて

— 満州引揚記録 —

鹿児島県 池田熊吉

大正十二（一九二三）年の関東大震災に遭遇し、命からがら郷里鹿児島にたどり着いたのは十六歳の秋だった。私は、国分高等小学校を卒業し、東京早稲田で新聞配達をしながら夜間学校に通っていた。当時、両親は私を頭に二男二女をかかえた農家で、名産の煙草耕作を営みながらも生活は貧しかった。弟は陸軍幼年学校に進み、妹二人は自宅で家事を手伝っていた。

私が帰郷したことで、両親は農業を継いでくれるものと期待していた。しかし、私は出郷の機会を考えながら、悶々とした日々を過ごしていた。

二十歳になり徴兵検査を受けたが、軍人への道はなかった。私は、中学や専門学校へ進んだ級友に影響されて、向学心に燃えていた。

大正末期の世の中は不景気で、鹿児島島の寒村では小作争議なども発生していた。昭和二（一九二七）年には金融恐慌が始まり、生活は一層苦しくなった。両親は、換金のために馬や牛を手離して、一時をしのいでいた。

そんな折、中学を卒業しても就職口がなく家で待機していた従弟が、伯母を頼って満州に渡るという話を聞いた。そこで、私も両親を説得して同行することにした。

昭和二年八月、従弟と私は大連経由で撫順の伯母の家に着いた。加治木中学校卒業の従弟は九月には就職ができたが、高等小学校卒業の私はなかなか就職ができず、食客としての肩身の狭い日々を送っていた。同郷のよしみでお世話にはなっていたが、両親からの仕送りはなく、ときどき日雇いに出て身の回りの品を買うのがやっとだった。

翌年になって、やっと私は昭和三年一月一日付で満鉄の雇用採用試験に合格し、同時に撫順の大官屯駅の保線区員に配置されたので、伯母の家

を出て社員寮に入った。やっと生活の糧に目途がついたのだった。

六月には、奉天（瀋陽）で張作霖が爆殺されるという、例の満州某重大事件が発生した。私ども満鉄の保線区員は現場に非常召集され、すさまじい光景を目撃した。

昭和五年四月には、親が決めた花嫁が単人ひなたやま日当山からやってきて、新婚生活が始まった。妻のミネは才媛というほどではなかったが、健康で温順な女性だったので、私は心身共に安定した。

昭和六年、奉天駅保線区に転勤し、長女が誕生し、幸福な家庭生活であった。一方、その年の九月には満州事変が勃発し、在満州邦人は緊張の日々を過ごすようになった。事変発生時、現場柳条湖近辺に、保線区員として急行したが、大規模な破壊ではなかった。その後、帝国陸軍は兵力を満州全土に投入し、態勢を拡大していった。その兵力の輸送やそのための鉄道の保線は、満鉄の任務であった。私も保線区員の一人として遠く北満

チチハルまで遠征し、兵士と一緒に寝食を共にして働いた。

その体験談を「晝陽河の先陣戦」と題してまとめていた。それが、当時発行されていた満鉄社員健闘録に掲載されたことは大変に嬉しいことだった。

昭和八年、撫順駅保線区に転勤となった。ここで長男が誕生し、親子四人の家庭は平和で温かいものだった。

ところが、その平和な家庭も長く続かず、昭和十一年には長男が病死してしまった。傷心の中を、蘇家屯駅車掌区へ転勤となった。そこでの勤務は不規則であって、妻には随分と苦勞をかけた。その間に長女が小学校に入学するという喜びもあって、やっと落ち着いた家庭生活を取り戻した。

昭和十三年、生まれて間もない次男を病気で失うという不幸に見舞われ、夫婦親子して悲しみに沈んだが、長女も二人の弟が相次いで亡くなり、寂しそうであった。

その後、次女、三女と次々に恵まれたが、その子たちも昭和十四年、十五年と相次いで野辺の送りをするようになってしまった。

当時、私は牡丹江駅の運転司令に昇進していたが、四人の子供を他界させてしまい、悲嘆にくれていた。妻と長女が元気に振る舞っていることがせめてもの慰めではあったが、私は、朝夕仏壇に向かつて読経を続けることで四人の冥福を祈り、そして自分の気持ちの救いを求めている。

昭和十六年には、三男が誕生した。十歳になつていた長女も、久しぶりに眺める赤ん坊に嬉しうだった。私たち夫婦も、この子は何が何でも無事に成長させたくて、細心の注意を払っていた。

その年に、図們駅助役として転勤することになった。図們駅は満鉄の中でも後発の地であったが、牡丹江より気候的には好条件なので安どした。長女は延吉の女学校に進学し、昭和十九年には四女が生まれ、家族に楽しみが増えていった。

図們駅の周辺は、朝鮮民族が多く居住しており、

駅員にも採用されていた。私は助役としての責任から、管理においても日本人、朝鮮人の差別なく接遇していた。その中でも、間島省に住む徳重正とは家族ぐるみの交際だった。徳重は儒教的教養があり、奥さん方の両親も含めて孝養を尽くすことを第一主義としている、立派な駅員であった。

この時期、太平洋戦争は激しさを増し、東條内閣が総辞職したり、サイパン島が陥落したりと、戦局は逐次不利になりつつあることは察せられていた。しかし、満州は爆撃もほとんど無いし、戦時体制もそれほど緊張化していなかったため、五族協和、王道樂土の庶民生活はほぼ平穩であった。昭和二十年前半には、我が家族は満鉄の社宅に住み、子供たちも順調に成長し、恵まれた生活、幸福な日々を過ごしていた。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が突然にソ満国境を侵犯し、図們、延吉方面にも接近しつつあるという情報を得た。徳重も彼の下に集まって来るいろいろな情報から事実を知っていて、植民地解放

の勢力が、ソ連軍に呼応することなどを教えてくれた。徳重は一刻も早い避難を勧めてくれたが、満鉄社員の幹部として、また大日本帝国の臣民として、応諾することはできなかった。

その後、情報がどんどん入り、在満日本人の間には不安と緊張が膨らんできた。私どもは関東軍を信頼していたが、そのころにはもう組織的にソ連軍に圧倒され、互解していたことを後で知った。

「助役さん！ 奥様とお嬢さん、坊ちゃんだけでも安全な地へ避難された方が良いのではないのでしょうか？ 私の妻も奥様や子供さんのことを大変心配しています」と言ってくれたが、私は「ソ連軍がこの街に侵攻してくるかどうか今は分からないが、各団体と連絡をとりあつて対策を検討してみるよ。徳重さん、ご親切ありがとうございます」と答えた。妻のミネもお礼を言ったが、それに応えて、「奥様！ お手伝いすることがございましたら、何でもおっしゃって下さい」と言つて出て行つた。

私は、徳重の後ろ姿を追いながら「王道楽土」の

満州で、この後起こる悲劇を予想することはできなかった。

ミネに「出勤するぞ！ お前は今日中に預金を引き出しておいでくれ」と言いながら、私は慌ただしく制服に着替えた。部屋に、女学校に通う京子と五歳になつていた芳宏が入つて来た。京子も芳宏も両親の焦燥を既に感じていて、不安な表情だつた。「父ちゃん！ 二学期は延吉の女学校に登校できるよね！」と云うので、「ああ！ 大丈夫だよ」と、事態の深刻なことも考えずに返事をしてしまった。そして「京子はしっかり者だから、芳宏や雅子の面倒を頼むよ」と激励しながら、絵本をぶら下げている芳宏の頭を軽く撫でてやつた。そのとき、別室にいる二歳になつたばかりの雅子が泣き始めたので、京子も芳宏も走つて部屋を出て行つた。これが、この満鉄の社宅で家族とゆつくり話し合つた最後であつた。

駅に着いたら夜勤の者も残つていて、三々五々と集まつて小声で話し合つていた。「ソ連軍は、中

立条約を無視して満州全土を侵攻しているようだぜ」とか「関東軍は一体何をしているんだ」「凶虜街まで攻めてくるだろうか」というような悲観的な言葉や、「列車の運行は我々で死守するのだ！」という力強い言葉も聞かれた。満州国建国以来、祖国日本を崇め、関東軍を誇りとし、五族協和を信じて今日まで安住してきた者の中では、既に祖国日本が焼野原になっていることや、関東軍が弱体化している現実を知っている人は、ほとんどいなかった。ましてや、ソ連軍の侵攻が強大であることや、大日本帝国が敗れて満州国が崩壊するななどということは、思いもよらないことであった。

駅長室に集まった凶虜列車区の幹部の表情はだれ彼となく沈痛で、室内には重い雰囲気が漂っていた。藤井駅長が立ち上がって、「ソ連軍は延吉を目標しているようで、数日中には我が街も危険に陥る情勢である」と、駅長の承知している情報を説明した。それに対して「豆満江の橋を壊せば防げるのではないか」とか、「ソ連軍は飛行機で偵察

している」などの意見が交換されたが、所詮は戦闘状態にある非常時に民間人にできることには限界があった。座が一時白けたとき、再び駅長が立ち上がって「池田君！ 臨時列車の要請があるのだが」と、苦渋に口が歪んだまま発言した。集まっていた一同も、顔色を変えた。避難が現実味を増してきた。つい先ほどまで「関東軍の輸送のためなら、満鉄社員としての榮譽を守るためなら、命を捧げる」と披瀝した覚悟がぐらつく思いがした。「駅長さん！ 臨時列車は何両編成で、目的はどこへお考えでしょうか？」と、私は具体的に聞いて確認をとろうとした。駅長は、「まずは、各団体の女性と子供二百余人で、避難先は梅河口だ！。まるで哀願するような口調になっていた。出発予定は、明後日十二日の夕方を予定しているとのことだった。駅長は次に、運転司令の首藤君に発言を促し、「満鉄の力を發揮させてもらいましよう」と言った。昼食が運ばれたときに駅長は、「諸君、この計画は内々に進めてほしい」とポツリと言っ

た。車両の準備とダイヤの編成は、助役である私の任務であった。出発は八月十二日、行き先は梅河口と決定した。

その日の夕方、帰宅したら徳重夫妻が待っていた。徳重淑も礼儀正しい人だった。二人共朝鮮人であるが、流暢な日本語を話し、日本の習慣もよく理解していた。そして、日本人である私共と、誠意をもって交際してくれることが嬉しかった。特に京子は大変かわいがってもらい、何かと世話になった。徳重が心配して、これからの駅のこと、避難のことなどを尋ねていた。私は、駅は男たちで守る、家族は十二日の夕方、梅河口へ疎開するなど、昼間決まったことを簡単に話した。徳重夫妻は我がことのように喜んでくれた。夕食も一緒にとった。食卓には、徳重夫妻の丹精した夏野菜や卵が盛られていた。

数日もすれば、異郷で追われる身になる日本人と、解放される勝利者の朝鮮人と身分が逆転することなど夢にも思えない、和やかな会食だった。

食事が終わると、徳重は「さあ！ 荷物づくりを始めましょう」と言って腰をあげた。私は「なあに、しばらくの疎開さ、冬物だけ持って行けば良いだろう。春には帰って来るよ」と言って、今後の事態を未だ樂觀視していた。大陸に住む日本人の驕り心は、甘い判断に終始していた。しばらく整理していたら、靈感というか、この地を再び踏むことはできないのではないか、という身震いに襲われた。十八年間に亘る満州での貴重な写真と、満州の大地に埋葬した四人の子供の位牌を袋にまとめて、貴重品と共にミネに渡した。携行する荷物は、明日中に徳重が駅に運んでくれることになった。世話になったお礼を言うのと、「いえ、私が今日あるのは助役さんのお陰です。私共の両親も感謝しています」と言って、丁寧に頭を下げた。残った家具や台所用品、そして布団や衣類は、徳重夫妻に使ってもらうように、ミネが心から申し出た。夜も更けて、徳重夫妻を玄関先まで見送ったが、いつもと変わらない静かな風景で、私も久

しぶりに美しい星空を眺めた。

思えば、二十歳過ぎて渡満以来、幾星霜、既に四十歳を越える男になっていた。親子で見上げる彼方に、私と妻の故郷、国分と日当山がある。年老いた両親に孫を見せたいという望郷の念が湧き、久しぶりの感傷に浸った。

八月十二日の夕方、梅河口に疎開する妻子たちを乗せた臨時列車は、予定どおり出発した。徳重の奥さんが「子供たち」と言つて、握り飯の包みを渡してくれた。残った我々男たちは、満鉄社員としての使命に燃え、国防支援のためのダイヤ運行を平常通り進めた。

八月十五日早朝、ソ連軍の戦車の砲撃でたたき起こされた。図們街の日本人は、着の身着のまま山中に逃避した。混乱の中、天皇陛下の玉音放送を聞くこともなく、この日から敗戦国の民族となつてしまった。私たち満鉄社員も、異郷の山河を十日余り彷徨して、吉林市に入った。私は逃避の途中で足を捻挫してしまい、他の人より一層難

渋した。

吉林に到着した私は、すぐに吉林病院に行き、そこで日本が降伏した事実を知った。敗戦国民となつた吉林の日本人は、追われるように避難をしていて、病院には日本人の医師、看護婦はほとんど見かけなかった。そのとき、目の前を京子が通り過ぎた。「京子！ 京子ではないか？」と叫ぶと、気が付いた京子が「あつ！ 父ちゃん、父ちゃんだ」と口に出して、今にも泣き出さんばかりの顔で駆け寄つて来た。「母ちゃんたちはどうしたー」と聞くと、「病室にいるの。芳宏と雅子が病気なの」と言つて、涙をふきながら病室に案内した。家族は逃避行の途中で子ども二人が具合が悪くなり、一行からとり残されてこの病院に入つていたとのことだった。五歳になつたばかりの芳宏は、久しぶりに見た父親に懐かしそうに微笑を浮かべていた。快方には向かつているようだったが、頬の肉は落ち目は凹み、顎は尖り弱々しく寝台に腰掛けていた。二歳の雅子は、高熱と腸カタルで衰

弱がひどく、寝たきりとのことだった。私は、奇跡的に家族と再会できた喜びよりも、変わり果てた我が子の姿に呆然となり、見守るばかりだった。ミネにいろいろと尋ねると、食事はおむすび一個ずつで、所持金も残り少ないとのことと心細そうに俯うつむいていた。

吉林病院は既に麻痺状態になっていて、日本人に対しては簡単な診察と施薬しかせず、食事も少量しか支給しなかった。子供の命を助けてほしいとすがる親の願いをよそに、生きる者だけが生きれば良いという、冷たい態度が恨めしかった。

「苦勞をかけたね」と、やつれが目立つミネと、母をかいがいしく手伝う京子に、心を込めて慰めの言葉をかけた。ミネは「あなたはソ連軍に殺されたかとも思ひ、心配したわ」と涙声で言った。「父ちゃんと一緒になれたのだから、家族で頑張ろうよ!」と、京子はけなげに声を弾ませて言った。

九月になると満州の大地は、朝夕に寒さが身に

染みるようになった。夜はミネと二人の子供は寝台に、京子と私は毛布にくるまって床に寝た。日本人に対する険悪な治安の下、ときには闇米を買い、病院の裏庭でポプラの小枝を折って飯盒米を炊いて飢えを凌いだ。

忘れもしない九月十八日、私は、凶們疎開団体代表の久米さんと、満鉄吉林事務所で開催に会った。今日までのいろいろな出来事を話したが、久米さんは梅河口の治安も悪化してきたので、南満州に移動する考えを話してくれた。さらに、私の三個の荷物は社員倶楽部に保管してあると言ったが、この状況ではどうしようもなかった。

敗戦によって日本人は主権のない民族となり、財産も生命も保障されなくなったし、その上異郷の地で略奪や暴行の惨禍を被り、混乱の渦の中で流浪の民と化していった。頼りになるのは、日本人同士で団体を組み自衛することで、団体行動が唯一の生き延びる道であった。

私は、病院の窓からポプラの落ち葉を眺めなが

ら、不安と焦燥に駆られていた。そのとき、同階に入院している牡丹江の団体の人に電話があった。話の内容を聞くとはなしに聞いてしまった私は、電氣にでも触れたように全身が反応した。今夜七時。吉林から撫順に向けて、日本人疎開の列車が出発するということだった。千載一遇の機会だ。私は直ちに決心した。牡丹江団体を主とする疎開だったが、私はつかみ下がってでも乗ろうと覚悟した。私は、びっくりしているミネたちを激しい剣幕でせき立て、持てるだけの荷物を下げて、あたふたと病院を飛び出した。

その日、九月十八日は満州事変勃発の日で、中国人にしてみれば国辱の記念日であった。ただでさえ対日感情が悪化している吉林では、自警団が日本人の行動を監視するために、街の要所要所にたむろしていた。黄昏の大通りに、棍棒や日本刀を持った一団のざわめきが、不気味に響いていた。私はおぼつかない中国語で撫順疎開を説明し、通行許可を懇願した。ミネも京子も深々と頭を下げ

た。痩せ衰えた幼児を背負い、薬缶と飯盒を提げたみすばらしい親子の姿を、しばらくじろじろ見ていたが、団長らしい男が「你、満鉄社員 嗎、好」と愛想よく言って、手で通れという合図をしてくれた。私たちは、「謝、謝」とお辞儀をしながら通り抜けた。

吉林駅に着いたら、団体の人々は大型貨物列車に詰め込まれつつあった。貨物列車用のホームでないので、押し上げたりよじ登ったりして、や々と家族全員乗車することができた。激しい動悸がしばらく続いていた。「自警団に捕まった人もいたそうだ」という話が耳に入った。俺たちは幸運だったと思うと、親子五人助かる希望が湧いてきた。周囲を見回すと、薄暗い車内は身動きができないほどの混雑であった。幼児の泣き声、病人のうめき声、座り場所を奪い合う罵声などが交差し、騒然となっていた。ふと横を見ると、牡丹江駅時代の同僚の田中さんだった。子供の状態がただならない様子だったが、田中さんは、「昨日から

この状態なんです。でも吉林に残っても、どうにもなりませんものね」と、無念そうにつぶやいていた。異郷に一人残る死の恐怖よりも、団体の中で生き抜こうとする選択は、私と同じ決意だった。

列車には、もう長くは持つまいと危ぶまれる子供も大勢いた。親としては幼児を畳の上で看取り、安らかな往生を願うであろうに、重病の子も連れて乗り込んでいた。敗戦下の極限状況では、生きる執着ゆえに倫理も感傷もない不条理があった。

人間として生き抜くためには、本能が思考の根源を占めていた。「子供の具合が悪いのですが、少し席を譲っていただけませんか」と、若い母親が哀願する声で訴えた。すると、それに応じて「少しでも譲ってもらえないだろうか」と世話人らしき男が大声をあげて協力を呼びかけた。すると、あちらこちらから「譲れ、譲れと言うが、どっちに譲ればいいのだよ」「そうだ。立っている者もいるのだぞ！」さらには「せいたくを言うな、仕方ないさ」と言う。これが、同じ日本人の間で

交わされる現実の言葉であった。人間、環境が変われば平常心を失うのは分かっていたが、私を含めて畜生のような醜態に自己嫌悪を覚えたことだった。

梅河口駅に停車したのは夜中だった。私は貨車の扉を少し開けて外を見たが、駅舎の明かりが暗闇に浮かんでいるだけだった。ここには、凶們団体が避難しているはずだった。そこに京子が寄って来て、「私たちは降りられないの。セーラー服の入った荷物もここにあるのでしょうか」と夢中になって言っていた。なんとと言っても多感な女学生であった。私もいつそ下車して合流しようかと迷ったが、撫順で会えることをわずかな望みとして未練を断った。列車は漆黒の平原を一路南下していた。車内は、疲れと空腹のためほとんどの者は眠り込んでいた。雅子はミネの腕の中に、京子は母にもたれ、芳宏は私の膝に寝込んでいた。子供たちの安らかに寝入っている姿を見ているうちに、過ぎし四十年のことが走馬灯のごとく思いめぐら

され、そのうちに私も疲れからうとうとしてしまった。
った。

闇の静寂の中に、突然若い母親の悲鳴が響き、はつとして我に返った。その母親は「大事な侃ちゃん……主人に申しわけない、ああ侃ちゃん！」と言いながら、息を引き取った子供を激しく揺すっていたが、その中に自分も声をあげてしゃくりあげた。世話人が懐中電灯で照らし、幼児の臉を押さえ合掌した。母親は、嗚咽しながらうつ伏していた。一夜のうちに、いたいけな幼児の命が遂に消えてしまった。冷たくなっていく我が子を抱いて離さない母親の姿に、憐憫の情を禁じえず、幼児の冥福と八月一日に応召されたという父親の無事を願って、手を合わせた。

列車が清源駅に着いたのは、九月十九日の午前十時ごろだった。団体の代表五人が下車して、駅長室に向かったということが伝わってきた。駅のホームは中国の保安隊が銃を持って警戒していたが、間もなく「停車二時間、身の安全は保障され

る」という連絡があった。車内の緊張が一斉に解けて、各車両からは人々がぞろぞろと降りてきた。女性たちは一斉に線路を横切って草むらに向かつて走り、群がって用を足していた。一息ついたところで次の指示があった。「駅長の厚意で、遺体の埋葬許可が出た」ということだった。家族を亡くした者にとつては、こんな荒涼たる異郷に埋葬するなどは耐え難い苦痛であろうが、非常時の団体行動では諦めざるを得ないことだった。各車両からは、遺体と共に家族などが列をなしていた。私も、牡丹江機関区の山崎さんの三歳になる女兒の埋葬に従った。人の遺体は、駅の裏山に埋葬されることになった。そこは石ころもなく、掘りやすい場所だった。あどけない顔の女兒には、銘仙の単衣が着せてあり、遺髪を切った痕が痛々しかった。白い布を顔に掛けた小さな遺体が、冷たい土の上に寝かされた。みんなは合掌しながら弔意を述べ、冥福を祈った。家族のすすり泣きが続いていた。「どうぞ、土をかぶせてやって下さい」と

言う山崎さんの声は、沈痛にみちっていた。今まで悲しみをこらえていた母親は、我が子の名前を呼びながら泣き崩れた。墓標もない土の墓を振り返りながら、山崎さんの悲嘆が察せられた。我が子と故郷へ帰れない痛惜は、忘れられないだろうと思つた。

このような悲劇の背景は戦争だった。戦場の残酷さに限らず、居住地も砲爆撃され、混乱し、日本民族の苦難に拍車をかけた。異境の地で国策に裏切られ、遺棄された日本人はなす術がなかった。日々の衣食住に窮し、医療に見離され、飢餓と病気で彷徨する流浪の民と化していたが、体力と抵抗力のある者だけが生き残った。また、生き残るためには、正義も礼儀も通用しない事実を、至る所で見聞した。そこには、かつての品格に優れた日本人の姿はなかった。

列車での南下はさらに続き、撫順城駅が近くあった。見慣れた風景が懐かしかった。市街地も広がり、新しい駅が建てられ、そこで停車した。満

鉄社員だったという世話人代表が「池田さん御承知ですが、撫順では団体の一員としては扱いませんので承知して下さい」と言ってきた。私は「はい、覚悟しています。住宅さえ与えて下されば結構です」「薄情なようですが、了解して下さい」「私は撫順まで乗せてもらったことに感謝して、深々と頭を下げてお礼を言った。ふと外を見たら、中国人の物売りが押しかけていた。籠に瓜やトウモロコシ、それに、饅頭まで盛り、なにやら奇声を上げていた。吉林を脱出して一昼夜、ほとんど食べていないので、みんなは先を争って買い求めていた。京子は瓜を食べたいと言っていたので、芳宏と雅子には吉林病院から持参したおにぎりが残っていたのでそれを与え、瓜と饅頭を買った。

団体が撫順城駅に到着したのは、午後三時を過ぎていた。団員は長途の疲れも見せず、慌ただしく降りる準備を始めた。親は幼児を背負い、荷物を抱え、歩ける子どもには相応の荷を背負わせた。それだけが家族にとって全財産であり、命の綱だ

った。出札口に向かっている団員の荷物を、中国の保安隊が検査している光景を目にした。まるで制服の強盗団そのものであった。残っていた団員は、口々に嘆きながらも、貴重品などを隠し始めた。ここまでやつのことで担いできた財産を奪われるかと思えば、やるせなく悲しかった。義憤は覚えても、敗戦国の民族にとっては、保安隊の無法な行爲であろうと、なすがままだった。この時期、蔣介石総統が発表した「恨みに報いるに徳を以って為せ」の理念は、遠い満州には浸透していないようだった。「ちよつと待て。最後に降りたらい」と私はミネと京子を制した。「毛布が心配ですわ」「京子、荷物から雅子の着物を出せ」私は、とっさに雅子の着物で毛布を包み赤ん坊に偽装し、それを京子に抱かせた。私たちは、一番最後に保安隊の前に立った。停車場に降りて、ミネに芳宏を背負わせ、手提げ袋と飯盒などを持たせた。私はリュックサックを背負い、雅子を抱くことにした。京子にはもうひとつのリュックサックを背負

わせて、偽装の赤ん坊の顔を隠すようにして抱かせた。そして、保安隊の前での細かい注意を与えた。「你好。你好」家族一緒に深々と頭を下げて、さらに「大人。大人」と中国語で丁寧にあいさつをした。みずぼらしい姿の私たちをじろじろと見ていたが、めぼしい物は持っていないようだ、と、怪しむこともなかった。「好。好。」と言って通過してよい合図をした。「謝々」「謝々」ミネも京子も声を励ましてお礼を言った。駅前の広場まで来ると、思わず声が出た。私は「助かったなあー」と声を張り上げて言った。ミネも京子も声が弾んでいた。「私、今でも心臓がどきどきするわ」「母ちゃん　よかったね」「はいどうぞ、もう一人の赤ちゃん」京子は、微笑みながら毛布を母に渡した。

撫順の日本人街は、中国人街を通り、渾江^{コシヨウ}を渡った高台にあった。つい二カ月前までは、きれいな着物で街を歩き、尊大な態度をしていた日本人だったが、その同じ日本人がかくも変わり果てて、うつむいた姿で黙々と歩いているのを、中国人た

ちは嘲笑しながら見送っていた。

振り返れば、昭和六年九月以降、満鉄奉天列車区に勤務していた私は、関東軍に協力して各地に従軍した。その際、我が軍に占領された住民が避難する行列を、優越感を持って眺めていた。その集団は、柳の下で編んだ籠を天秤棒で担いでいる男、纏足のためよろけながら後を追う女、泣きながら従う子ども、どの顔も不安と恐怖でひきつっていた。それが、十五年を経た今日、因果応報にしては、あまりにも悲惨な日本人の姿だった。驕れる者は久しからず、哀しいまでの逃避行を続ける憐れな自分の姿に、気が重かった。

渾江の堤防が見えてきた。河の対岸には、日本の附属地があり、街をなしていた。「あと少しの辛抱だぞ！ みんな元気を出して歩くんだ」団体の世話人が、行列を励まして回っていた。私は、列の後方で田中さんの家族と一緒に歩いていた。吉林からの引揚列車で、衰弱の激しかった男の子が田中さんの奥さんに背負われていて、奥さんは幾

度となく背中の子を揺すっていた。「お母さん、隼人ちゃんの様子が変よ」女学生の長女がせきこんで奥さんに訴えていた。「隼人ちゃん、前から目を閉じたままよ」小学生の次女も、泣き出しながら後を追った。背中の子はぐったりと首をうなだれ、青ざめた顔に生気はなかった。「お母さん、お母さん。もうだめよ」長女が悲痛な声で叫んだ。

「いいえ、まだ、だめでないのよ。隼人の身体は、私の背中で温かいのよ」奥さんは、真つ直ぐ前を見たまま歩き続けていた。「お母さん、お母さん……」長女は泣きながら、ぐったりとなった弟の頭を支えた。「まもなく日本人の街に入るのよ。隼人は亡くなつてはいけないのよ」奥さんは、しゃくりあげる娘たちをとがめるように、必死になって歩みを早めた。「とうとう……。だめだったか……」「悦子、水は残っているかね」田中さんは静かに言った。長女は父に水筒を渡した。田中さんは息子の唇に水筒の口をあてがったが、水はそのまま細い顎に流れた。末期の水にしては、残酷な光

景となった。

私はその様子を見ながら抱いている雅子の顔のぞいた。熱が下がったせいか、血色が幾分戻ってきたようだった。ミネが背負っている芳宏も、目に力が戻っているのが分かった、私は、首に下げている四人の子どもの位牌を押さえ、「みんな一緒に故郷に帰るぞ」と全身全霊で誓い、心の中で合掌した。

団体の先頭は、渾江の堤防にたどり着いたようだ。どよめきが聞こえてきた。およそ三百メートルはあろうか、鉄骨の橋を渡れば日本人街だった。とうとうたる河の流れは、昔と変わらず静かだった。悠久の渾江の堤に立ち、大地に沈もうとする赤い夕日を眺めていたが、一カ月余り、異国への丘を逃避行した不安や恐怖に比べ、長閑な別天地の風景に見えていた。

日本人街は、躍進していた炭鉱の街を象徴するかのよう、豪華な三階建ての社宅が丘の上まで並んでいた。道路は舗装され、街路樹が整然と植

えられていた。「こんなにまで発展していたのか……」「撫順ではないみたい……」ミネも、感慨深げに久しぶりの街を見ていた。「父ちゃん、どの社宅に入れるの」京子は期待に目を輝かせて聞いた。「暖房と風呂があれば、言うことはないよ」と、迫り来る厳しい冬を想像した。満鉄社宅での生活は、一軒に三家族ぐらいが入られる雑居生活となった。

その後、私は幸運にも、ミネの伯父が営む新富興業に就職できた。お陰で衣類や食糧の心配もなく、家族は長い極寒の満州で生き延びることができた。

やがて、桃も桜も目が覚めたように花開く春が訪れた。芳宏も雅子もすっかり元気になり、その成長ぶりを見ていると嬉しかった。ミネと京子は、新富の伯父の世話で、雑貨の行商などに出掛けることもあった。中国人街の治安は落ち着いていたし、なじみの客も増えた。また、日本人同士の情報交換で、帰国の日を持ちわびるようにもなった。

凶門街を脱出してから一年が経過しようとする

撫順の街のアカシア並木に緑が増し、紺碧の空が眩しい夏が巡ってきた。ある日、私は満鉄の元上司と街中で偶然に会った。「池田君、日本人の引揚げが始まるぞ」「そうですか。いつごろになるでしょうか」「七月かな。引揚船への乗船は葫蘆島になるそうだ」撫順に居留する日本人団体に帰国の通報が届いたのは、七月の中旬だった。引揚げの日、撫順の空は晴れ渡っていた。駅には、大きい荷物を背負っている人の中に、白い布で包んだ箱を下げている痛々しい風景もあった。ホームには、長い無蓋車両が入っており、機関車がさかんに蒸気を上げていた。混乱もなく乗車した引揚列車は、安どと惜別の感傷を合わせて出発した。「姉ちゃん、僕たちが乗る白龍丸は、特急あじあ号より早いのか?」「芳宏ちゃんは、海を知らないものね」心地良い夏の風、照りつける太陽、引揚列車が葫蘆島に向かって走り続けていた。この春、誕生した命の声が「おぎゃあ! おぎゃあ」と聞こえてき

て新鮮な気を味わった。

白龍丸に乗船し、一路博多港を目指した。しかし船中では、日本の土を踏むことを目前にして亡くなった人々の水葬の悲劇を見てつらかった。白い御飯と梅干がおいしかったことも忘れられない思い出として残っている。敗戦による引揚げで犠牲になった幼児たちのためにも、新しい命と生き残った子どもたちを祖国に帰還させ、日本の平和と復興を託したいと願い、そばの芳宏を強く抱きしめた。

昭和二十一年七月下旬、白龍丸は博多港に接岸した。祖国に上陸できた安どと周囲の喧騒のため、めまいを覚えた。その後、検疫所で健康診断を受け、引揚証明書を発行してもらった。そして、鹿児島本線で郷里の国分へ向かった。

思えば、二年に亘る長く苦しい引揚者としての旅だった。沿線に映る荒廃した都市、美しい田園、雄々しくも優雅な桜島の風景に心癒された。

悲しみと喜びと経て、慕情の生家にたどり着い

た私共家族は、現実の厳しさに直面した。零細農家の我が家に、両親、弟家族四人、戦争未亡人の妹、それに私の家族五人の計十二人が居住することになったのである。寝るに部屋なく、食べるに米なく、その年豊作のかぼちゃや薩摩芋で飢えを凌いだ。

敗戦の混乱は倫理観を失墜させ、長男の私が別居となり、馬小屋を改装して移転した。衣食住すべてにこと欠く生活から脱出すべく、就職口を探したが見つからず、止むなく国分飛行場跡や山林を開墾して糊口をしのぐ暮らしとなった。戦後の混乱と貧窮のため、京子と雅子を上級学校に進学させられなかったことが慚愧にたえない。さらに、満州での苦楽や引き揚げてからの哀歓を共にした家内を、昭和三十八年に亡くしたことも、断腸の念止み難い痛恨事となった。

我が半生の最後の手記になるが、昭和三十年代、全国引揚者団体の鹿児島県の役員として、引揚者支援に貢献できたことを誇りとしている。私事と

しては、芳宏が中学校の教師となったこと、馬小屋で生まれた末娘ひろ子を含めてそれぞれ嫁ぎ、十人の孫を抱けたことで、幸福な余生となった。

結びにあたり、独立行政法人平和祈念事業特別基金より、引揚者の労苦を慰労する内閣総理大臣の書状を頂いたことに、深く感謝している。